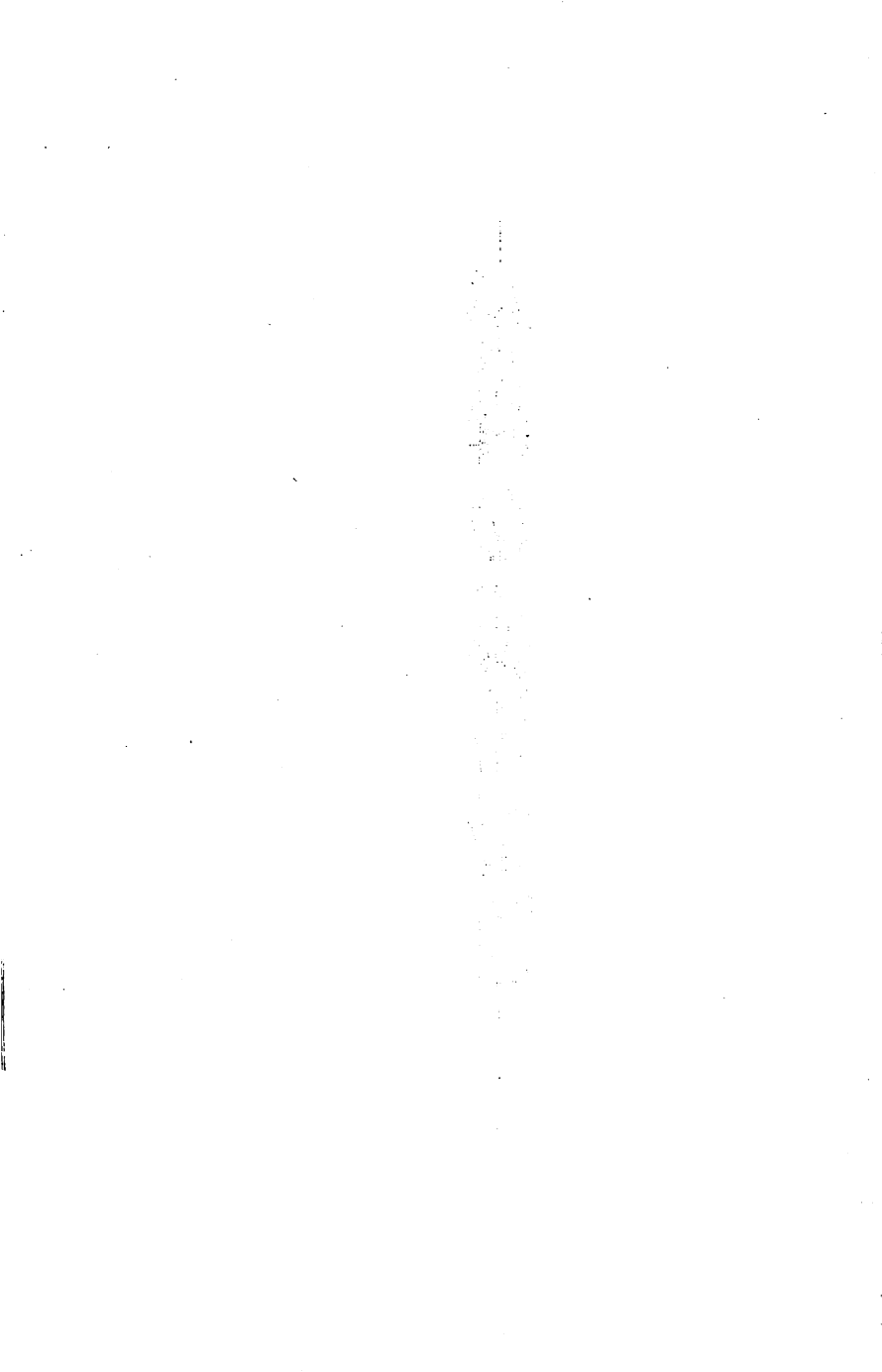


続

—
現代生活の指針
—



続現代生活の指針 目次

第六話 妙法のお話

一、大切な妙法の字義……………一

二、南無という意義……………三

三、観世音菩薩のご利益……………五

四、一切衆生に仏性あり……………八

五、釈尊の因行果徳の二法……………一六

六、妙莊嚴王のこと……………一八

七、供養讚歎之者のこと……………二九

八、仏子のこと……………三三

九、凡夫と仏……………三六

十、四無量心……………四〇

十一、諸々の仏は福慧を具足す……………四三

十二、主師親の三徳は我等の心……………四五

十三、自ら当に作法すべしと知る……………四七

十四、阿弥陀仏とその帰依について……………五〇

十五、福は内、鬼は外……………五三

十六、一生懸命……………五五

十七、もう一度考えて見よう……………五七

十八、柔伏ということ……………五九

十九、ただ一つ極楽道を進みたい	一四
二〇、小乗を捨てて法華經に依らねばならない	一五
二一、四誓願のこと	一六
二二、蓮華より化生せん	一七
二三、勝妙の樂	一八
二四、無明を破る鍵	一九
二五、世雄ということ	二〇
二六、眠りを断ちて案ぜよ	二一
二七、種、熟、脱の三益	二二
二八、大切な給仕	二三
二九、婦人の美德	二四
三〇、どうすれば忍耐が出来得るか	二五
三一、本当によい師に値うことは困難	二六
三二、病に随って薬を与える	二七
三三、贖命重宝ということ	二八
三四、下剋上の過	二九
三五、改悔贖罪	三〇
三六、病の六因	三一
三七、不淨觀と数息觀	三二
三八、槃特尊者	三三

三九、涅槃經の七種の衆生	一〇七
四〇、幸 福	一一一
四一、衆 生 濁	一一三
四二、劫 濁	一一三
四三、命 濁	一一四
四四、善 と 惡	一一五
四五、樹を觀じて思惟す	一二六
四六、釈尊と法華經と我等は一体なり	一二八
四七、慚愧 清淨	一二九
四八、信仰は心の洗濯です	一三〇
四九、妙法蓮華經菩薩法	一三三
五〇、行字二道を行なう	一三三
五一、信仰の目標は？	一三三
五二、現世安穩、後生善処	一三五
五三、諸天童子の供養	一三六
第七話 雪山童子のことなど	一三九
一、雪山童子のこと	一三三
二、檀王のこと	一四一
三、盂蘭盆經の意義	一五六
四、珠數のお話	一六四

第八話 信 仰 問 答 一七

一、貧しい者に布施はできるか 一七

二、法華經広宣流布はどうすればよいか 一八

三、諸仏はみな本仏釈尊の分身である 一九

第九話 日蓮聖人の御遺文について 一九

一、祈 禱 鈔 一九

二、生死一大事血脈鈔 二〇

三、法 蓮 鈔 二四

四、佐 渡 御 書 二七

五、如説修行鈔 三〇

六、諸法実相鈔 三〇

第六話 妙法のお話

一、大切な妙法の字義

「妙法」^{みょうほう}の妙の字は「不可思議」^{ふかしぎ}と訳するのであります。不可思議ということとは、人の智慧をもっておしはかれないことです。「不可思議とは大慈悲心^{だいじしひ}これなり」「大慈悲を以て諸事^{しよじ}を弁^{べん}ずれば弁^{べん}ぜざるなし、これを不可思議という」と御義口^{おんぎく}伝に説明されています。なにごとでも相手を思いやり、協力的な考えでしなければことを成就することはできないが、相手の事情をよく察し、相手の心に叶うようにすればなにごとでも成就します。

たとえば親子、夫婦の間柄でも、相手の心にあうように、進んで相手をいたわり慰めるように、あるいは言葉で、あるいは物質的にもことを運べば、必ず楽しくもまた愉快な結果となり、また自分の考えもいれられまして楽しいものです。相手に従って進む大慈悲心があれば、むつかしい問題でも必ず解決するのです。これは人の智慧で

もおしはかれない不思議な働きです。「人に従って従える」という古言もあります
が、人の力ではできないように思われることがいとやすく成就するというのが不思議
力です。

すなわち「妙」という字は不思議の力をあらわすと読んでもよいわけです。

「法」とは教とも訳し、天地宇宙の法則ともいえるのであります。

「蓮華」とは因と果を蓮華にたとえた文字です。

蓮というのは、よい原因によって美しい香、よい華を咲かせるようなよい種のこと
です。よい行ないをしてよい種をうえることです。

華は香もゆかしく美しい結果をうるということです。日蓮聖人はいんぎょう因行、か徳果徳とおっ
しゃったのです。さいわい幸となるべき原因になるよい行ないをすれば、その結果として、
人としてなくてはならない徳が身にそなわり、さいわいが続くということでありま
す。

なお、妙法蓮華の下にある「経」という字はしめくり、あるいは結ぶという意味

ですから、「成仏じょうぶつ」すなわち仏の境遇となるの意をもっているのであります。おなじ経という字でも、その上の文字によって変っていることは、南無という字義じぎとおなじです。妙法の教えによって、よい行ないをして徳をつめば、仏の境遇の人となるのだというのが、「妙法蓮華経」であります。

かように立派な行ないをすることは菩薩としての自分が本来の使命にかえたことになるのです。これを南無というのです。また自分の本来の使命にかえるために妙法蓮華の行ないをするのだと解してもよろしいのです。

二、南無という意義

「南無」というのは、仏、菩薩の名のうえに冠かんするものです。この訳は帰命きみょう、すなわち帰依きえし奉るといふ字義でありますが、実は南無の二字は妙法蓮華経の上に冠する時は、やや、意味がかわってきます。少しこまかく説明しますれば、

「自己本来の使命にかえる」

といった方が適當であります。自己本来の使命というのは、人と生まれてなにをすべきかということの意味しています。その使命とは法華經法師品第十に、

「この諸人等しよにんらは、諸仏しよぶつの所みもとに於て大願だいがんを成就じやうじゆして、衆生しゆじやうを惑あわれむが故に此の人間に生ずるなり。」とあります。

この諸人等というのは、仏の教えを聞く人達のことです。

なお仏さまのお心の中を打ち開けて説かれた法華經を聞く因縁のある者は、過去世において、仏さまとご一緒に、世の中の人々を救い助けるといふ仏とおなじ働きをした人のことで、仏としてのおおきな願いを完成した尊い人である（大願を成就して）。しかしながら現今の世の中をみるに思想は悪化して、世の中の人々は苦しみと悩みをつづけさせられている。そういう人達に本当の喜びの日を送らせて、世の中の人のためによく働けるように、自分とおなじように喜びの生活をさせたいと思つて、ふたたび人間に生まれてきたのである。

それは丁度仏さまが、わぎわぎ人間釈迦としてこの世の人としてお生まれになり、人間とおなじ暮しをされ、人間とおなじ苦しみを味わって、正しい道に進めない人をお導きになった。それと同じ考えをもって世の中へふたたび生まれた人であるということです。

人間に生まれたことはそういう使命をもって生まれたのであります。法華經を読み誦まもんずるような人は、みなこのような使命をおびた深い因縁の人であるから、まずもって親子、兄弟、家族の者を労わり慰め、救済せねばならぬ使命があるのだということ、法華經を読んでよく理解し、その使命をはたす心持ちにかえらねばならぬのだということ。いいかえれば、人間としての本来の使命にかえり、いき甲斐のある生活ができるようにすべきである、という風に解釈できるのであります。

三、觀世音菩薩の御利益

- 法華經は諸法実相の真理を説かれた幽玄な教理でありまして、釈尊の出世の本懐、仏さまがこの世の中にでられた目的をお説きになったものであります。その中の一部である觀世音菩薩普門品第二十五は人生活躍のすがたをしめされたものであります。
- 一、諸の苦惱をうくるもの、觀世音にいつしんに帰命し、その名を称うれば、觀世音はその名を聞いて解脱せしめむ。
 - 二、觀音を信ずれば、人生の苦難、すなわち火難、水難、風難、刀難、鬼難、囚難、賊難がのぞかれる。
 - 三、貪慾、瞋恚、愚痴の三毒よりはなれしめる。
 - 四、愛子をのぞむものには、福德智慧の男の子を、あるいは端正有相の女の子をさずけられる。

五、観音を信ずれば畏れなき勇氣を出すことをえる。また観音妙智力かんのんみょうぢりきといつてあらゆる艱難かんなんにうちかち、善事ぜんじをなしとげる不思議の力をあたえられる。

というようなことは、常識的にちよつと不思議に思われることであるかもしれません。しかしお経の解釈には、事釈じしゃくと、理釈りしゃくの二つがあります。

理釈というのは精神的に解釈することです。たとえば火難を除くというのは、瞋恚の炎を除くということですが、それは精神的救済を意味しているのです。観世かんせ音が音声おんおんじょうを聞いて救済するというのは、いま政治家が国民の声を聞いてよい政治をとるということもその一つであります。人と人の間では、相手の望みをよく理解してやる。世の人々のうったえている苦惱をよく観察して、その人、その人個人に適当な教えをあたえて、喜びへの道、仏門にいたる道を説いて導いてやる。世の人々の訴えを聞き、よく観察することが観世音ということです。それは精神的の救済であります。事釈というのは、日蓮聖人が、龍たつの口において法難をのがれたようなことではありません。重い病気が奇蹟的に全治したという話は迷信のようではありますが、精神療法は、

すでに現代の医学でもみとめているところであり、精神が肉体の支配者である以上、精神力によって病が左右せられるものであることはうたがいない事実であります。楽しく笑をうかべる生活であれば、食事が美味であり、唾液が旺盛に注出されて胃腸が丈夫になり、また、白血球の活動がさかんになり、自己の身体に浸入するバイ菌をふせぐ働きをさかんにしますので、医療の効も予期以上に効果的となり、重い病をものぞきうることは確実であります。

またよき子をあたえるということは、人間本能の欲求をみたすということを明示されたものであり、胎内にいるあいだから信仰生活にはいり周囲のひとに親切にすること、慈悲の心をやしなうことは、昔からいう胎内教育です。出生後も親の真実の慈悲と、よりよき教育で本当に立派な子供がめぐまれるということは、当然なことであります。次に

聞名及見身もんみやうきけんしん（名を聞き、及び身を見）

心念不空過しんねんぶくうか（心に念じ、空しく過ぎざれば）

能滅諸有苦（諸の苦ありと雖も能く滅する）

という偈がありますが、この意味はつぎのようです。

「名」というのは「教え」のことです。

「身」というのはよい行ないをした気高い「姿」のことです。

「心念」というのは、つねに菩薩としてのおこないを實踐して行くべく「決心」をすることです。

「不空過」というわけは、つねに心がけて、今日もまた菩薩行を、今日も善いおこないをと励むことで、「一日も無駄に暮す日のないように」することです。

「能滅諸有苦」は人間としての「色々な苦しみ悩みはついに解決し、滅し除かれて愉快な生活になる」ということです。これは精神的ですが、心が済われること確實です。

ついでに菩薩の意味を申してみましよう。

「菩」は「菩提」という熟語の頭をとったもので、菩提というのは、大きな智慧、

あるいは仏の智慧、まことの智慧ということです。

つぎの薩は「薩埵さつた」の熟語の頭字だけで薩というのです。薩埵は「人」ということです。薩の上に「摩訶まか」をつけて「摩訶薩まかさつ」という場合があります。摩訶は「大いなり」という意味です。それゆえ摩訶薩といえは、大きい心の人、度量が大きくて他人を親切にする人格者、という意であります。それゆえ菩薩摩訶薩と申せば、仏とおなじように人を救うような、大きな智慧をもった心のひろい人、という意味だということとがわかります。菩薩というのは人格者ということとです。

さて観世音菩薩はこの世に働き、世の中の人々を苦難の生活より救済せられるということが説いてあります。それは三十三身十九説法であります。どんなことであるかと申しますと、観世音菩薩が、世の中の人々を救済されるのには、あるいは仏、天人長者、居士、婦女、童子等種々の相になってあらわれ、世の人々を救済されるというのであります。これは三十三の数字にかぎられたものではなく、あらゆる境遇に応じて、種々の相をあらわして世の中の人々を救済し、さいど救度されるのであります。

たとえば病気の人を救済するには医者となってあらわれ、

学問を欲するものには教師となってあらわれ、

子供をそだてるには親（保母^{ほぼ}）となってあらわれ、

盗難をふせぐには警察官となってあらわれ、

火災をふせぐには消防士となってあらわれるのです。

しかし実際には世の中に観世音菩薩のようなお医者さんや、観世音菩薩のような教師や、観世音菩薩のような警察官、消防士はみたことがないという人があるかも知れません。決してそうはいえないでしょう。観世音の心をもっておられるお医者さん、教師も、警察官も、消防士もけっしてすくなくはありません。ましてや子を育てる母親の慈愛はまさに観世音菩薩であります。

また観音精神とは、すべての者を生かして働かせ、それに生命をあたえるということ、本当に有難いことです。

故杉田直樹博士は、精神薄弱児施設を私にひきつぐ時にいわれました。

「精神薄弱児も人間として生まれた以上、なにか世の中に役に立つことがあるのだ。使命をあたえてやりたいということを考えました。それは観音精神です。二宮尊徳先生は観音さまを信じた方ですが、こんなことをいっておられる。一粒の米粒も、どうか世の中に役立つように生かしてやりたいという慈悲。一尺ばかりの糸でも、この糸の生命を生かしてやりたい。たとえ石コロ一つでも、その生命を生かしてやりたいという慈悲をもって考えれば、みな世の中に役立たせることができるのだと。それが二宮先生の観音精神です。もったいないというよりも、すべての物を生かしてやりたいという恵む心がけの方が、きっと物を大切にします。この心がけで行けば毒の物でも医薬として人のために使われる。例えば『モルヒネ』のように。人間は人間で本当に生きて働かねばなりません。生きた人間を死んだ人間のようにさせてはならない。これをよい言葉でいえば適材適所ということにもなります。精神薄弱児にもなにか使命をあたえてやろうと思ひ、第一に

一、精神薄弱児になる原因を調査して、世の中の人々に精神薄弱児を生まないような

警告をあたえるために、その「モデル」とし研究の資料として、少しでも社会の役に立つならば、彼等の使命は達せられると思います。

二、宗教的に考えてみる時、世の中の人々は余りにも感謝の心がなきすぎる、もし自分が精神薄弱であったならばと考えますれば、有難いなという感謝の念が増してきます。

三、彼等のすぐれた長所を生かして職業の補導をすれば、立派に彼等も人と生まれたその生命を全うすることができる。」と。

こういうお話が杉田博士からありましたが、これは立派な観音精神からおこるのであります。

このようにすべての人が観音精神を体得し、観世音菩薩の心を心として、人生の苦しみや悩みを助けあうならば、ここに立派な観世音の救済事業が実現せられまして、この世の中に楽しい極楽浄土が現出するわけであります。観世音の心をすべての人に普及し、徹底させたいものです。かように仏の教えを信じ、行なうことによってわが

すなわち、一切の世の中の人の心の中にはことごとく仏とおなじ性質があるということ。その仏の性質とは、親子、兄弟は仲よく、楽しく暮したいということ、気の毒な人をみれば助けてあげたい、いたわってあげたいという心は、みな仏さまとおなじ精神でありまして、この心持ちが誰にもある、それを仏性というのであります。仏の教えを読んだり、また聞いたりしますあいだに、いま申しましたような仏とおなじ性質、すなわち仏性が育って、悪い心がけがだんだんなくなり、ついに仏さまとおなじ智慧がそなわって、仏さまとおなじ働きができるようにあります。その時が成仏といって仏になった時であります（即身成仏）。

かように自らもっている仏性を養いのばすために、仏さまの教えを信仰せねばならぬということ、解っていたいただきたいのです。観音精神というのは、その精神であります。こうして観世音菩薩のような精神で暮して行きますならば、家も国もごく楽しいこと極楽のごとくです。これがわれらの住む国を浄土にするということでもあります

（娑婆即寂光土）。

さあみなさん、観音精神で明るく楽しく暮らしましょう。

五、釈尊の因行果徳の二法

観心本尊鈔

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与へ給ふ。

お釈迦さまは仏であります。それゆえ仏としての万の徳をそなえていらっしゃるのです。しかし仏としての徳をそなえられたのは、長い間の修行として、よい行ないをし、善根を積まれたからであります。その修行せられたことが因であって、徳は修行の結果としてえられたものです。

因行、果徳というのはこのことです。われらも仏の境遇になりたいと思えば、お釈迦さまが仏の境遇になられた修行の方法を实行しましょう。そうすれば、仏とし

ての徳がそなえられるのであります。その原因となる修行、仏としての徳をえる法、すなわち二つの法は妙法蓮華經の五文字に具足されているのです。この秘法をならいおぼえて実行しましょう。これが本当の信心です。

「成仏」すなわち仏の境遇をうることに疑いなしであります。

六、妙莊嚴王のこと

法華經の文字は「一々文々是真仏」といわれています。この妙莊嚴王の四文字も、成仏を教えています。又この王は「転我邪心」といって、邪心をあらためて仏に帰依し、ついに仏の境界に達したのであります。この妙莊嚴王は末法における邪悪の心を持った人々が、仏の教えを聴受して仏になることをしめたものであります。

御義口伝には「妙莊嚴王とは、末法の衆生なり」とあります。

妙莊嚴王とは、妙、莊嚴、王と三つにわけて考えるとよろしい。妙とは不可思議と

いうことです。

「不可思議とは大慈悲を以て諸事を弁ずることなり。大慈悲を以て諸事を弁ずる者を大菩薩という」と、御義口伝にあります。

人に慈悲があればどんなことでも解決するものです。家庭も平和になります。必ずまわりの人々から喜ばれます。大慈悲の行ないは、体中の動作が大慈悲で莊嚴にされ、かぎりなされるのであります。それが仏です。

王という字は旺さかんなりという意です。また王とは天、地、人を徳を以てつらぬくという意であります。慈悲がない者は他人に思いやりがないので、上は下を憎み、下は上を憎み、おたがいの意見があわずして、家の乱れ、国の乱れとなるのであります。大切なことは他人の心を思いやり、助けたり、助けられたりすることであり、上と下というものはよくできたものです。上という字は下が見えぬ線があり、下という字は上が見えぬように線があります。王という字は上中下をつらぬいています。人という字はおたがいに助けあいをするようにできています。この理ことわりをよく了解して、

わがままをせぬように、大慈悲を以って親に孝行し、夫婦相和し、わが子を愛し、他人とも助け合って幸福な境遇を作らなければなりません。いままでこのことに気がつかなかつた人々も、その邪心を転じて、大勢の人から愛され、たよりにされる人になる、この行を妙莊嚴王というのです。いまの世の人々はみな妙莊嚴王になりたいものです。

七、供養讚歎之者のこと

供くは供そなえる、あたえるということ。養はその相手の善心をやしなう、その心の喜びをやしなうということであります。供養の対象となるものは仏ですが、その仏はいまは亡き仏と、生ける仏とあります。生ける仏は、仏性をもつ世の中の人々のことでもあります。その仏の供養には、

第一に「利供養」といって物質的のお供え。

第二には「敬供養」と申しまして、その仏の功績を讃えることであります。よいことを讃えることであります。よいことを讃えることでもあります。よいことを讃えることを讃歎と申します。

第三には「行供養」わが正しき行ないによって相手の仏を喜ばせるこの三つが大切であります。この供養は亡き仏の供養もちろんながら、生きた仏に供養すれば「当まぎに今世こんぜに於て現げんの果報かほうを得べし」と法華經にあります。

生ける仏様であるご両親のご恩に感謝し、その恵めぐみを讃歎致しますことは、両親としてこの上の喜びはありません。必ず「得現果報とくげんかほう」まちがいなしで、親と子の間柄はますます親密にして、敬いあうことができます。子に対してはその長所をほめ、その善き行ないをほめてのち、善からぬことあればこれを教えるようにいたしますならば、その子供の善心はのび育って、もし善からざる子供でも必ず善い子になります。これは子供の育て方の秘訣であります。夫婦のあいだもまたおなじように、自分のうけている恩を感謝する実行は、必ず夫婦の和となります。悪世といわれる現在の世の中の人々は人の欠点を吹聴ふいちやうしあうような行ないが多いので、おたがいに心と心にへだたり

を生じ、不和を生じて家の乱れとなり、国の乱れとなります。おたがいに相手の長所を讃歎しあうならば必ず、一家円満、国も治り、幸福は期せずして招来しょうらいします。一軒の家の中、人々の心が別々になり、意見があわぬようでは、家は栄えません。このことをおたがいによく理解して、生き仏さまの供養をして魂の利益を得ましょう。

おたがいに長所をほめあうことは一番大きな供養です。ただちによい報むくいがくるといのが法華経の金言です。その心掛けがまた物質の施しともなりまして、おたがいの親密さが増して、家の中も世の中も楽しいものになります。法華経を信じあう人々は生き仏さまを讃歎して、現在ただちによい果報を得ましょう。

八、仏子のこと

仏の子といえは、釈尊の御子羅睺羅みこらごらと考えてはならぬのです。仏子文珠等ぶつしもんじゆとあるをみてわかります。また、宝塔偈ほうとうげには「能く来世に於て此の経きやうを読み持たんは是れ真

の仏子ぶつし」とあります。これはひろい考え方の仏子であります。されば未来世に法華經をたもつ人々みな、仏子であることが理解せられます。なお広くは「一切衆生悉く是れ吾が子」一切の人間はみな吾が子であるともいわれています。

まことに有難いことで、我々は仏の子であることはまちがいないのであります。仏という尊い人種がほかにあるのではなく、われわれは仏と同族である。しかし人間としてよからぬ行ないをする者も仏の一族であり、仏の子といいうるでしょうか。仏さまは「一切衆生悉有仏性いっさいしゆじやうしつうぶつしやう」と申しておられます。いまは心得ちがいをしているが、その心の中には妻子を愛し、気の毒な者を見れば救いたいという心持ちをもっている。この性質は、仏さまと異なることのない尊い性質であって、これを仏性というのであります。この仏性をそだてのばせば、必ず大仏となりうるのであります。その仏性をのばしそだてるにはどうすればよいかと申せば、仏さまの教えにしたがい修行するのであります。これを菩薩行とも申します。

親の意志は子につがれるということが自然であり、仏教の精神であります。また親

の徳も子に引継がれることもちろんであります。されば菩薩の修行をして大仏になれば、自然に親の意志と徳は子に引継がれるのであります。末法まつぽうとて親おや仏ぼとけ釈しゃく尊そんが滅せられたのちにおいて、仏子は何をせねばならぬか。仏の意志をついで「娑婆しゃば即そく寂光じやくくわう土ど」この世の中、この世界を極樂のごとき平和の世界とせねばならぬ、大責任の意志をつがねばなりません。

仏さまの教えを了解したわれわれ仏子は、仏の意志をつぎ、親仏のなさんとせし仕事、即ち「自ら此の念を為す。何を以ってか衆生をして無上道むじやうだうに入り、速に仏身成就じやうじゆせしめん」との一大事を行なうことに、精進せねばなりません。日々の家業をつうじて、この修行をすることでありませす。日々の家業はみな社会奉仕の事業です。この仕事をつうじ、各々の職場において、仏の子である修行をして、周囲の人々の心に光明と希望をあたえ、生き甲斐ある働きをして行かねばならないのであります。

九、凡夫と仏

凡夫というのは平凡な人、凡智にたけた人をいいます。仏とは覺者かくしゃといひます。凡夫の生活は楽しいものではないと覺つて、凡智をつかわず、生き甲斐のある暮しをする人です。

日蓮聖人は一生成仏鈔に「迷ふ時は衆生しゆじやうと名なづけ、悟さとる時をば仏と名けたり」とおおせになつています。いまだ法華經を知らない人々は、仏という境遇は、絶対にたかい理想の境遇であつて、凡夫のいたることのできないものとおもつていますが、けつしてそうではありません。仏、釈尊が、この世の中にでられた意義は、この大事を解決するためでありました。されば、お釈迦さまは、方便品ほうべんぽんのなかに「我本誓願われもとせいがんを立てて一切衆をして、我が如く等しくして異なることなからしめんと欲しき」と申されています。

世界中の聖人、神といわれている人も、世の中の人をことごとく、自分とおなじ境遇に引上げて、しかもおなじ楽しみをさせてやろうという、大慈悲を持った方はないように思います。ひとりお釈迦さまはまことに有難いご慈悲をもっていらっしゃる方です。お釈迦さまのお経の中でも法華経以外のお経には、仏という境遇はどんな境遇かということや、どうすれば仏になれるかということは教えてありません。

昔の僧の中には、法華経以外のお経の中に成仏の道が説いてあるようにいっている者がありますが、それはでたらめをいっただけです。たとえば「大日経に一念三千の義がある」というのはでたらめの説です。法華経以外の経には十界互具（人々の境遇を十に区分したもの）も、諸法実相（世の中の暮しの真実のすがた）も説いていないかわかりません。あるいは十界中の九界を説き、八界を教え、七界、六界を教えているようなことでは、世の中の真実のすがたはわかるはずは絶対にありません。仏の境遇を説き一念三千、諸法実相を如実に教えているものは、世界中の教えの中で法華経のみであります。されば法華経には、「諸の經典は数恒沙の如し、その中に於て法華

經、最第一なり」といわれています。

世の中で「よい行ない」といわれているそのよい行ないの中でもっとも高く尊いことは、世の中の人々を仏の境遇に導くことです。お釈迦さまのように人々を高い理想の境遇に導き、最も楽しい意義ある生活をした方はめずらしいことです。かように人々を仏にするように教え導く考えを「仏智ぶつち」と申し、最も尊い考えです。この仏の智慧をもって、自由に楽しくはたらく者が仏であります。凡夫が仏になれないということは、仏になる教えを知らず、見ぬからです。誰でも仏になれることを教えた法華經を説のごとく修業すれば、みな仏になれるのであります。毎日の働きはこの仏の教えを修行するのではありません。

その仏に成る修行の働きは苦しいことのように考えられていますが、決して苦しいものではありません。親に孝行すれば、親も自分も愉快です。夫婦や兄弟のあいだがらでもたがいにならぬ慰さめ合う、それは愉快です。お勤めに出る人々も、又お百姓でも、商売の人々でも、みなその仕事は社会奉仕の事業です。お客さまの喜ばれるよ

うに相手の便宜をはかれば、かならずあとは楽しく愉快です。この理を覚って本当に意義ある働きをして行く人が仏です。その身が仏です。これを即身成仏と申します。あなたも仏になれる人です。法華經の修行をして、仏になって下さい。極樂をつくって下さい。

十、四無量心

これは法華經の方便品の中にある、仏の智慧の一部であります。人々がこの四無量心しむりょうしんをそなえれば、人間には想像できないような無量の徳の行ができる。そうして世の人々より愛され、尊ばれるのであります。

一、慈心じしん 自分が生きていくことによって、周囲の人々の幸福を増したいという心持ち、これを行ないにあらわして人々の苦しい心、悲しい心をいたわり慰め、よいことをほめて善行を増させる。あるいは物質的に困る人々には、物質的の布施をす

る。なお本当に幸福な人とするには、よい教えをあたえるなど、自分の存在することによって、より大勢の人々に幸をあたえる行ないをすることである。

二、悲心ひしん 〓 自分の存在することによって、周囲の人々の苦しみをのぞいてやりたいという心持ちこれも際限さいげんがない。一人でも余計に苦しいことをのぞいてやりたいものです。この心持ちを行ないにあらわしては、いたわり、慰め、励まし、なお物質的にもめぐみ、なおその苦しみ、悲しみが人を救う体験となり、大きな力となるべく悟らせ、苦しさも、悲しさも、少しも意に止めぬほどに教えをあたえる。

三、喜心きしん 〓 人の幸福をあくまで一緒に喜んでやりたいという心持ち。他人がしあわせになったことを喜ぶ。よい悟りをしたことを喜ぶ。法華経を信じて、仏道修行をして行く者を喜ぶ。この心がけさえあれば、子供のよい行ないをほめ、親のご恩に感謝してご恩をたたえるという行ないになる。まことによいことであります。凡夫は人がしあわせになることを好まない。「うれしや隣りの倉も売れたげな」というように、凡夫というものは人の不幸を喜ぶものです。それと反対に人のしあわせを随ずい

喜^きすることが仏の行ないである。

四、捨心^{しゃしん}||自分が今まで骨折^{こせつ}ったことにたいしてむくいを求めない。また人がいまま
で悪いことをしていたことがあっても、それ^{それ}にたいして前のことを忘れてやる。凡
夫は自分が人からうけた恩^{おん}を忘れて、人に対して骨折^{こせつ}ってやったことや、施^せしたこ
とをよくおぼえているというふうであるから、人から嫌^{きら}われます。人にうけ
た恩^{おん}をよく忘れないように感謝^{かんしゃ}してゆくことこそ、大切^{たいせつ}であります。

慈^じ、悲^ひ、喜^き、捨^{しゃ}、の四つの心持ちは、あらゆる人々の上にその力が及ぶので、その
功德^{こくどく}はじつに無量^{むりやう}であります。われわれの日々の働^{はたら}きは、この徳^{とく}をつむ働^{はたら}きをする
か、さもなければ罪業^{ざいごふ}をつくるかであります。よくよく考^{かん}えて毎日^{まいにち}を徳^{とく}をつむ働^{はたら}きと
しましう。